



IUFRO-J NEWS

No. 89 (2006.12) —

IUFRO 拡大理事会報告

中静 透（東北大学）

たいへん報告がおそくなりましたが、2006年5月に開催されたIUFRO拡大理事会のご報告をします。拡大理事会は、毎年1回、理事（General Board Member）、各部局（Division）のコーディネーターと、作業部会（Task force）コーディネーター、それに事務局からなる総勢40名を超える会議です。今年の拡大理事会は、5月3 - 5日という、日本のゴールデンウィークの真っ只中に、オーストリアのウィーン郊外BFW Mariabrunnにある、IUFROの本部（写真-1 2）で行われました。日本からは、中静が理事として、酒井秀夫氏（東大、Division 3）、吉本敦氏（東北大、Division 4）、鎌田直人氏（東大、Division 7）の3名が各Divisionの副コーディネーターとして参加しました。

5月3日は朝から、政策部会（Policy Committee）と科学部会（Science Committee）に別れて会議が行われました。政策部会は主としてIUFRO全体の方針や運営について、科学部会は科学的なベースでの具体的な議論を行います。前者は、理事を中心とした会議で、後者は各部局コーディネーターを中心とした会議です。この2つの会議を受けて、4日には全員出席の拡大理事会が開かれ、議決が行われました。5日には、エクスカージョンで近郊の森林や施業の見学を行いました。

拡大理事会の内容は、政策部会および科学部会の報告を含んでいるので、この報告をもって政策部会の報告も兼ねることにします。科学部会の報告は、鎌田氏の詳細な報告を参考にしてください。



写真-1 拡大理事会の会場（鎌田直人撮影）



写真-2 拡大理事会の様子（鎌田直人撮影）

今回の理事会では2005年8月のIUFROプリズベン大会で新しい会議メンバーが加わっていたため、まず全員で自己紹介をしました。その後、前回の理事会の議事録が了承され、理事長(D. K. Lee)、副理事長(政策部会: J. Innes, 科学部会: N. Koch)、常任理事(P. Mayer)から挨拶がありました。議題としては、1) プリズベン大会の評価と反省、2) 理事および拡大理事の仕事と役割などに関する説明、3) 2006-2010年における各部局の主要問題、4) および科学部会の報告、5) 特別プログラム / プロジェクトおよびGFIS (Global Forest Information Service) の活動、6) 2006-2010 IUFRO Strategyについて、7) 予算計画について、8) IUFROの国際的貢献について、9) 地域活動について、10) 次期の開催について、があげられました。以下、それぞれの内容について報告します。

1) プリズベン大会の評価と反省

プリズベン大会の評価としては、アフリカやラテンアメリカからの参加者は増えましたが、まだ他の地域に比べると少ないので活動の強化が必要であること、招聘に何か資金を使ってはどうか、という議論がありました。また、学生がオーガナイズしたセッションも3つあったことは評価できますが、INTECOL(国際生態学会)と開催時期が重なってしまったことはマイナスで、今後調整が必要であることなどが議論されました。

2) 理事および拡大理事の仕事と役割などに関する説明

これについては、拡大理事会のメンバーに対するものなので省略します。

3) 2006-2010年における各部局の主要問題

各部局が今後2006 - 2010年で取り組むテーマについて、各部局コーディネーターから説明がありました。部局ごとに書き留めたキーワードを並べると、以下のようになります。

Division 1: Silviculture

man-caused and natural disturbances, changing needs

Division 2: Physiology and Genetic

improvement of non consumptive forest products, link phenotypes to genes, ecological and society issue (genetic diversity, GMO)

Division 3: Forest Operations Engineering and Management

global challenges, Sustainable development, effective mechanisms to collaborate with society, technology development and transfer, chain management, eco-efficiency concept, life cycle assessment (LCA), damage

management, ecological risk management

Division 4: Forest Assessment, Modeling and Management
changing environment, interface between forest management and assessment, new management model, integration of model, risks and uncertainty

Division 5: Forest Products

integration of science with industry, improve image of scientists in public eyes, nanotechnology, bio-energy, effect of climatic change on wood properties

Division 6: Social, Economic, Information and Policy Sciences
integrative science, ecosystem services, social and behavioral processes, urbanization

Division 7: Forest Health

promote key scientific area, improve communication, alien invasive pests, biosecurity, pollution

Division 8: Forest Environment

ecosystem function, biodiversity, natural disasters

4) 政策および科学部会の報告

政策部会の報告として、まず現在動いている作業部会の現状について報告がありました。また、国連森林フォーラム(UNFF)を推進するために、国際林業研究センター(CIFOR)や国際アグロフォレストリー研究センター(ICRAF)との共同を進めるべきであるという方向が打ち出されました。とくに、UNFFは科学助言機関をもたないので、IUFROがイニシャティブをとってその役割を演じるべきだという議論がなされました。IUFRO世界大会とは別に地域でのIUFRO集会(たとえばアジアIUFRO大会というような)を開くためのガイドラインを作成するという事も報告されました。科学部会の報告については、鎌田氏の報告をご参照下さい。

5) 特別プログラム / プロジェクトおよびGFIS (Global Forest Information Service) の活動

特別プログラム / プロジェクトの報告では、SPDC (Special Programme for Developing Countries)からはキャパシティビルディングの要請は大きい資金が足りないということが強調されました。とくに日本に対してはBIOREFORで長年協力的であったので、何らかの新しい資金源を探してほしい旨、とくに要請があった。SilvaVox(多言語林業・森林科学用語検討事業)からは、アラビア語などの言語にも広げる必要がある、データベース作成を続ける必要があるという主張があったが、資金的には継続が困難になりつつある、という報告がありました。World Forest, Society and Environmentはフィ

ンランド政府の助成でCD-Romを出版する。GFISはいくつかの国からのサポートがあるので、当面活動を継続することに決まりました。

6) 2006-2010 IUFRO Strategy について

IUFRO Strategies 2006-2010 については、2004 年秋のレビューを経て承認されており、それを今後実行に移すことが確認されました。なお、IUFRO Strategies 2006-2010 は小冊子としてすでに出版されているほか、IUFRO のホームページからもpdfでダウンロードできます。

ウェブサイト：<http://www.iufro.org/>

7) 予算計画について

2005 年の決算と2006 年の状況、2007 年の予算案が説明され承認されました。また、いくつかのプログラムでは資金が足りないので積極的に資金源を探す必要があり、そのためにどんな方策があるかという議論がなされました。

8) IUFRO の国際的貢献について

IUFRO の国際社会における役割として、UNFF での科学助言機関としてのイニシアティブをはじめとして、モントリオールプロセス、国連食料農業機関 (FAO)、国際熱帯木材機関 (ITTO) などで、もっと IUFRO が深くかかわってゆくべきであるという議論がなされました。また、すでに国際自然保護連合 (IUCN)、熱帯農業研究教育センター (CATIE) とは協力に関する覚書 (MOU) を結んでいることが報告されました。

9) 地域活動について

各地域における IUFRO の活動として、IUFRO Latin American Congress が2006 年にチリで開催されます。また2007 年にはポーランドで European Congress も計

画されています。韓国政府からは北東アジア地域事務所をサポートするという申し出がありましたが、IUFRO 理事長韓国事務所という形で5年間維持することが決められました。

10) 次期の開催、そのほか

指名委員会 (Nominating Committee) からは表彰の推薦 (Award nomination ; Distinguished Service Award, nomination procedure, prize) に関する説明があったほか、次回の拡大理事会は2008 年6月に北京 (中国) で開催されることが報告されました。最後にこの会議を総括する議論があって、会議を終えました。

エクスカーショ

翌5日は、エクスカーショで、Hauersteig にあるヨーロッパトウヒの植林試験地 (写真-3)、Monastery Heiligenkreuz という修道院が経営する森林を訪問し、昼食のあと、Klausen Leopoldsdorf にあるモニタリング試験地を訪問しました。Klausen Leopoldsdorf では、ブナ林で、EU-Project “NOFRETETE” (窒素サイクルおよびヨーロッパの温室効果ガス収支に与える影響)、“NITROEUROPE” (ヨーロッパ森林生態系からの窒素酸化物放出) などのプロジェクトがおこなわれており、多くの機材を設置した総合的なモニタリングが行われているのが、印象に残りました。

以上、簡単に雑駁ではありますが、IUFRO の拡大理事会の報告です。来年3月には日本で管理委員会 (Management Committee) を開くように要請されすでに準備に入っています。ご協力いただくことがあるかもしれません、どうぞよろしくお願いします。



写真-3 トウヒ密度試験地

IUFRO 科学部会会合 (Scientific Committee Meeting) 報告

鎌田直人 (東京大学)

中静氏による拡大理事会の報告に続き、科学部会会合の報告を行います。科学部会は、IUFROの研究活動に関する方針を決定して、実行に移す組織です。そのため、今後のIUFROの活動方針に影響する科学部会に関する情報は、IUFROに関係する読者の皆様にとっても有益だと思われます。

科学部会の会議も、5月3日にウィーン(オーストリア)のIUFRO本部の建物の1階で、政策部会(Policy Committee)ミーティング(2階で開催)と同時進行で行われました。IUFRO副会長で科学部会委員長でもあるNiels Elers Koch氏が議長をつとめました(写真-1, 2)。各自が自己紹介を行ったあと、今回の議題と、前回科学部会会議(2005年8月オーストラリア・ブリスベンでの第21回IUFRO世界大会期間中に開催)の決議内容の確認が行われ、前回からの保留事項がないことが確認されました。

引き続きIUFRO会長のDon-Koo Lee氏のあいさつが行われました。その中で、この5年の間、科学部会が若い科学者の育成につとめるよう要請されました。次いで、Koch氏が挨拶を行い、IUFRO Strategies 2006-2010の中でも、以下5つの項目の達成が特に重要であると述べました。

ゴール1.1: 時代とともに変化する、森林や樹木に関する研究ニーズやその優先度に対して常に敏感であり、これらの変化に迅速に対応すること。

ゴール1.2: 研究の質、公正さを向上し、研究能力の強化を目指すこと。

ゴール2.1: 学際分野の協力を推進すること。

ゴール2.3: 地域内や地域間での協力を推進すること。

ゴール3.2: 科学と政策の結びつきを密接にし、国際的な政策決定においてIUFROが科学的な責任を果たすこと。

そして、これらの達成のためには、科学部会が、IUFRO理事会・政策部会・IUFRO本部と緊密な連携をとる必要性をKoch氏は強調しました。

科学部会で取り扱われた、主な議題とその内容は以下の通りです。

1. 組織と役員

Koch氏が、IUFROの活動単位であるワーキングパーティー(Working Party)や研究グループ(Research Group)の新設と廃止の手続きの説明を行いました。そ



写真-1 議長のNiels Elers Koch氏(左)とIUFRO会長のDon-Koo Lee氏(右)



写真-2 科学部会会合の様子

のあと、各部門より、組織やウェブ管理者の改革や変更点について、以下のような報告がありました。

Division 1, 2 : 組織の変更はほとんど行われていない。

Division 3 : 組織の大幅な改組を行った。また部局名を“ Forest operation ” から“ Forest operation engineering and management ” に変更することを提案する。

Divisions 4, 5, 6, 7 : 組織のマイナーチェンジが行われた。

Division 8 : 組織の大幅な改組を行った。

次に、ワーキングパーティー、コーディネーター、研究グループコーディネーター、部門 (Division) コーディネーターの任期や選出方法について意見が交わされました。なかでもワーキングパーティー コーディネーターの任期や、研究グループ コーディネーターの選出方法がまちまちであることが問題点としてあげられました。これらについては、今後、L. Valsta と M. Wingfield の2名が、改革案をまとめて提示することになりました。

また、IUFROのウェブを実質的に取り仕切っているのは、研究グループのウェブ管理者です。たとえばワーキングパーティーがシンポジウムを開催するための情報をIUFROのウェブに載せるためには、研究グループのウェブ管理者を通す必要があります。したがって、研究グループのウェブ管理者は、研究グループやその傘下にあるワーキングパーティーの活性を左右する重要な責任を負っています。

2. 第21回IUFRO世界大会の総括

次に、オーストラリアのブリスベンで開催されたIUFRO世界大会について意見が交わされましたが、主な内容は、中静氏の報告に紹介されているので、ここでは省略します。

3. 他の国際機関との連携の強化

2005年10月よりIUFROは国際科学会議 (International Council for Science; ICSU) の正式会員となりました (図-1)。ICSU加盟の際に会長を務めていたIUFRO前会長のR. Seppala氏が、ICSUの組織の仕組みとIUFROがICSUの会員となることのメリットについて説明を行いました。Seppala氏は、IUFROが各地域のICSUと緊密な関係を築いていくことが、今後重要になってくることを強調しました。なぜなら、ICSUは多くのファンドをもっておりこれを積極的に利用していくことがIUFROにとって有用であるからです。また逆に、

ICSUが提起する科学的な問題に対してIUFROが貢献する必要性についても強調されました。また、ICSUを通して国連の諸機関との連携を構築していくことも、IUFROにとって重要です。

4. 各作業部会 (Task Force) の総括と今後の活動方針

炭素吸収 (Carbon Sequestration) 部会については、コーディネーターであるW. Kurz氏の続投と部会の延長が報告されました。また、森林の炭素研究に関するこれまでの研究成果を統合して、モニタリング手法の改良・モデルの開発・政策の分析や政策への助言を行うことを、今後の部会の活動方針とすることが説明されました。

森林バイオテクノロジー (Forest Biotechnology) 部会は、2005年のIUFRO世界大会の直前にコーディネーターがEl-Kassaby氏に代わりしました。彼は、部会設立当初に作られたレポートが現在では時代遅れであることを指摘し、遺伝子操作生物 (GMO) だけでなく、遺伝子流動やバイオテクノロジーの応用に焦点を当てていく新しい計画を説明しました。この新しい計画に関するレポートの出版協定が、すでにCFSとIUFROの間で結ばれていますが、FAOも出版に取り込む必要があることを力説していました。

絶滅危険種と自然環境保全 (Endangered Species and Nature Conservation) 部会は、レッドリストに記載された生物種に対する保護と管理の情報を蓄積することを目的とするという説明がなされました。すなわち、この作業部会の目的は、あくまでも情報や知識の整理であって、新しい研究に対して補助することではあり

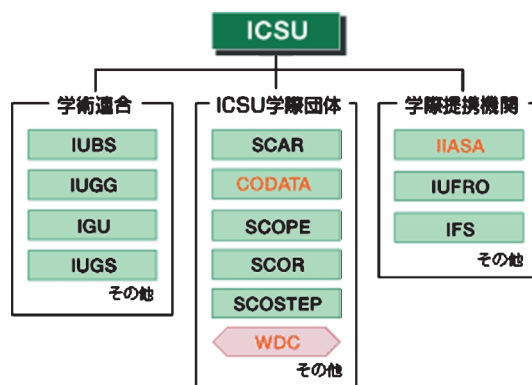


図-1 ICSUとその関係機関の関係 (国立環境研究所地球環境研究センターHP <http://www-cger.nies.go.jp/cger-j/db/info/org/icsu.htm> より転載)

ません。作業部会では、今後いくつかのワークショップを企画しており、その成果はIUFROシリーズの出版物として出版される予定です。また、関係するワーキングパーティーと密接に連携していくことが求められました。

伝統的な森林知識 (Traditional Forest Knowledge) 部会では、コーディネーターである J Parrotta 氏が、ブリスベンでの拡大理事会議以降の作業部会の進捗状況について説明を行いました。科学部会メンバーからは、伝統的な知識と近代の先進的な知識との共通点と相違点を明確にしていくことが必要だとする意見が出ました。また、先住民に限定せず、農民や田舎の人々の知識も、今後研究する必要があるのではないかとする意見も出されました。

森と水資源 (Forests and Water Resources) 部会については、政策部会で討論されることが紹介されました。

5. IUFRO Strategy 2006-2010における科学部会の役割

科学部会委員長の Koch 氏が、30ある IUFRO Strategy 2006-2010 のアクションのうち、9 つについては科学部会が中心になって担わなければならないことを説明しました。これら9つのうち主なものについて以下に紹介します。

Action 1 : 政策決定者と同じように、新たに生ずる問題とパラダイムの変化に敏感に対応して、科学者と研究機関が何をすべきかを見極めること。

Action 2 : 新たな問題に対して、IUFRO の組織が迅速かつ柔軟に対応できるようにすること。

Action 3 : IUFRO の部会はある一定レベルの活動を維持する必要があり、不活発なユニットは廃止すること。次の科学部会会議では、各ユニットの活性度の査定を行うこと。

Action 9 : IUFRO 複数のユニットが共同で活動することを推奨すること。

Action 10 : IUFRO の活性化のために、関連する研究者の IUFRO への参加を促すこと。

Action 11 : ICSU など他の国際的な学術機関と協力し

ながら、国際的にも、各国内においても、戦略的なプログラムをもってイニシアティブをとること。

Action 13 : 森林科学の専門知識を他の組織まで広げるために、研究プログラムの評価、研究プロジェクトのレビューと専門の論評家のリストを、科学部会が提供すること。

6. 部局間の協働

今後の集会は、部門レベルの垣根を越えた協力が必要であるということで意見の一致を見ました。特に、林業が急速に発達しているラテンアメリカで開催が予定されているラテンアメリカ地域 IUFRO 集会には、すべての部門から参加があることが望まれます。

7. 世界大会のための科学部会大会の設立

前回のブリスベン大会で証明されたように、IUFRO 世界大会の成功のためには、優秀な科学部会大会委員長が欠かせません。そこで、科学部会では、米国農務省 (USDA) の全面的な支援を得られる Division 1 の副議長 J. Parrotta 氏を、次回、韓国で開催される第22回 IUFRO 世界大会の科学部会大会委員長にノミネートし、Parrotta 氏もこれを受諾しました。

8. 学生の IUFRO へのリクルート

若い世代を育成することは、どの研究分野にとっても重要な課題です。したがって、IUFRO への学生の参加は、森林研究分野への将来投資と考えるべきです。前回の IUFRO 世界大会で、IUFRO への学生の参加に重要な役割を果たしたのが国際留学生協会 (International Federation of Forestry Students; IFSA) でした。したがって、IFSA は学生に対して IUFRO を認知させ、逆に我々も IFSA が IUFRO のメンバーに浸透するように努力する必要があります。日本の森林科学関係の学生も積極的にこれらの活動に参加して行くことが望まれます。

以上、簡単ではありますが、科学部会の報告とします。何かの参考になれば幸いです。

The 4th International Symposium of Gall Forming Insects and Symposium of the IUFRO Working Party 7.03.02 Gall-Forming Insects 「BIODIVERSITY OF GALLING ARTHROPODS」開催報告

鎌田直人（金沢大学*）

*：現所属，東京大学

平成17年9月5日から9日まで京都市左京区の京大会館で「Biodiversity of Gall-forming Arthropods（ゴール形成性節足動物の生物多様性）」のシンポジウムが開催されました。このシンポジウムは第4回目となる国際ゴール形成昆虫シンポジウムとIUFROのワーキングパーティ7.03.02 Gall-Forming Insects（ゴール形成昆虫）のシンポジウムとして合同で行われたものです。大会委員長は湯川淳一氏（九州大学名誉教授），事務局長が大串隆之氏（京都大学生態学研究センター），IUFRO ワーキングパーティー 7.03.02のコーディネーター Heikki Roininen氏（フィンランドJoensuu大学），そのほかに8名の運営委員，京都大学を中心とした学生・院生のお手伝いによって無事に開催することができました。ゴール形成昆虫のシンポジウムとしては今回が4回目となりますが，これまでと異なる点として，対象を昆虫に限定せず節足動物まで広げたこと，また，ゴール形成者だけではなく，寄居者やゴールを形成する微生物を媒介する節足動物にまで対象を広げてシンポジウムを行ったことが大きな特徴です。シンポジウム参加者は71名で，そのうち国外からの参加者は29名でした。29題の一般講演と28題のポスター発表が行われました。このシンポジウム開催にあたり，IUFRO-J，日本学術振興会，京都大学21世紀COEプログラムから援助を受けました。報告に先立って，感謝の意を表します。

9月5日の午後3時より受付が始まり，午後5時より京大会館1階のホールで歓迎会が開かれました。大串隆之氏が司会進行を行い，湯川淳一氏の歓迎挨拶に続いて乾杯を行い，その後歓談が8時頃まで続けました。

翌9月6日は京大会館2階のホールで8時30分から開会の挨拶に続き，8時50分より口頭発表が行われました。昆虫生態学の有名な教科書「Insect Ecology」の著者でもあるPeter W. Price（アメリカ合衆国北アリゾナ大学）による「Diversity of gall-inducing species through space and time（ゴール形成種の空間的・時間的な多様性）」という講演で幕を開けました。午前と午後にそれぞれ6題ずつの講演がありました。6日の講演は無事に終了したものの，折から台風が接近しており，翌9月7日午後には風雨が強まりました。そのため，7日午後に予定していたゴール採集会を，急遽9月8日に変更し，9月8日に予定していた口頭発表のうち6題を9月7日に行うことにしました。9月7日夜は7時より懇親会が開催されました。このように，天候のためやむなくスケジュールが変更されたため，9月8日午前中でセッションは終了し，8日午後のゴール採集会（京都市郊外）と，9月9日の京都市内観光のエクスカージョンが，学術講演終了後に連続で行われました。

台風による日程変更のアクシデントこそあったものの，発表はすべて無事終了し，大成功のうちに大会を終えることができました。

なお，本シンポジウムの講演のうちの一部は，森林総研の尾崎研一氏，湯川淳一氏，Peter W. Price氏の編集により，下記書籍として出版されています。興味のある読者には一読をお勧めします。

Ozaki, K., Yukawa, J., Price, P.W. (eds.) (2006) Gall-forming Arthropods and Their associates: Ecology and Evolution, Springer, Tokyo, 308 pp.

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J研究集会事務局・参加助成の募集について

平成20(2008)年3月までに開催されるIUFRO関連研究集会に対して事務局・参加助成を行います(参加の場合は海外での集会のみです)。希望者は平成18(2006)年12月末日までに、規定の書式にしたがい助成申請を提出してください。助成申請書の様式は、IUFRO-JニュースNo.88に掲載されたものをコピーするか、下記のウェブサイトからダウンロードして下さい。

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/jyosei.htm>

2. IUFRO-J 平成19年度機関代表者会議のご案内

第118回日本森林学会大会が九州大学で2007年4月1日(日)~4日(水)の日程で開催されます。それにあわせて下記の日程で表記会議を開催致しますので、機関代表者の方のご参加をお願いいたします。

日時: 2007年4月3日(火) 昼休み

場所: 九州大学内(詳細は未定)

議題: 会務報告, 会計決算報告, 監査報告, 事業計画案, 予算など

3. IUFRO Management Committee Meeting

平成19(2007)年3月5日~9日に、IUFRO Management Committeeが森林総合研究所で開催されます。この会議は、IUFROの全体のマネジメントに関する会議で、出席者は理事会メンバーやセクレタリーを中心に15~20名、3月6, 7日に会議が、8日には日帰りのエクスカッションが予定されています。IUFROの重要な会議が日本で開かれるということですので、会員の皆様にご協力をお願いする事もでてくるかと考えます。よろしくお願いいたします。

4. IUFRO-J Newsへの寄稿のお願い

IUFRO-J Newsの内容を充実させるため、IUFRO研究集会の開催予定や内容紹介、森林・林業・林産業に関連する研究機関の情報等、会員で広く共有したい事項について記事をお寄せ下さい。会員相互の情報交換の場として「IUFRO-J News」をご活用下さい。

IUFRO-J News No. 89 平成18年12月11日

国際森林研究機関連合-日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

〔編集・発行〕